



あかるく・やさしく・たくましく

■入園・進級おめでとうございます！

お子さまの新入園あるいは進級、誠におめでとうございます。新元号『令和』が発表され、新年度のはじまりと共に新たな時代の幕開けを感じるところです。また、この新しい時代が子どもたちにとって、明るくより豊かな時代になることを切に願うところでもあります。

改元という非常に大きな事から始まるこの2019年度ですが、教育の観点からみると「ゆとり脱却」を唱えて早数年、2020年の大学入試改革を柱に、日本の教育も大きく変わろうとしているところです。

その根本には、IT環境もさることながら、AI（人工知能）の台頭をはじめとする時代の変化が大きく影響していることはいうまでもありませんが、それ以上にこれからの時代を生きていく日本の若者たちの「自己肯定感」の低さが懸念されています。

今、小学校以降の学びで声高に言われているのが、『アクティブ・ラーニング』です。『アクティブ・ラーニング』とは、簡単に言うと子どもたちが自ら主体的に色々なことに参加し、仲間と共に深く考えながら課題を解決する力のことであり、その為には、知識もさることながら、自分を律する力、「自制心」や「やる気」「創造性」「協調性」「社交性」や「共感性」等々、いわゆる社会で役立つ力、「非認知能力」が重要であると言われています。まもなく、小学校でも英語やプログラミングが必修化されますが、授業を受けることが重要なのではなく、そういった事に取り組む姿勢、気持ちが大切であり、知識の詰め込みではなく、

小学校以降で学び、意欲的に取り組むための素地をこの幼児期に育てることが重要なのです。

その根本に当たるのが「自己肯定感」ではないかと思えます。しかしながら、日本の若者（満13歳～29歳）を対象にした意識調査（平成25年：内閣府）によると、自己肯定感を持っている若者は50%に満たない45.8%という結果で、軒並み70%を超えている諸外国に比べると、圧倒的に低い数字となり、日本の若者の自己肯定感の無さが浮き彫りとなりました。

この結果はつまり、自分の将来に明るい希望が持てていないということにつながります。将来に明るい希望を持てるかどうかは、自分自身を肯定的に捉える内部要因と自国の将来を肯定的に捉える外部要因がありますが、自己肯定感の高い若者や自国の将来に明るいイメージを持っている若者は、同様に自分の将来に明るい希望を持っている割合が高いという結果が出ています。

自己肯定感が高い若者の特徴をみると、家族関係、学校生活、職場生活が充実し、満足している若者ほど、自己肯定感が高いというデータもあります。当たり前といえば当たり前ですが、やはり、何か特別なことではなく、日々の生活の中の体験、経験が内面に大きく影響していることは確かです。

いずれにしても、まずは子どもたちの笑顔がたくさん見ることができ、そんな環境づくりを心掛けたいものです。今年度1年間、どうぞよろしくお願い致します。

園長 野口 大仁